特集　朝日大学経営学部の研究シーズ

産業遺産・観光・まちづくり・地域の魅力・そしてゼミ活動
(The Recent Research Topics -Industrial Heritages, Tourism, Town Development Project and Regional Attractiveness- and Seminar Activities.)

経営学科　中垣勝臣
NAKAGAKI, Katsuomi

1.　最近の研究テーマ

「明治日本の産業革命遺産　製鉄・製鋼、造船、石炭産業」が 2015 年に世界遺産に登録された。2014 年に世界遺産に登録された群馬県の「富岡製糸場と絹産業遺産群」とともに、近代化産業遺産がようやく日本でも世界的価値のある遺産だと広く認識されるようになってきた。この種の工場や生産設備は旧式化すれば廃棄され、土地は更地にされて新たな設備が建設されるなどして、有効利用されるのが常である。そんななかで、奇跡的に解体を免れ、価値を見いだされたのは素晴らしいことである。さらに、歴史的価値のみならず、100 年前の産業の遺産を利用して観光地化を図り、あるいは地域の宝として町おこしを図るなど、地域を再活性化させる未来志向的な複合的価値を生みだしている。

私自身が経営史を教えている立場から、ヨーロッパの産業革命には強い関心があり、イギリスとドイツの産業革命に関する遺産を 2013 年に訪れ、地域の現状を視察した。産業遺産と観光〔産業〕と地域〔活性化〕を結びつけて、何か論じることができないかと考えていたからである。イギリス産業革命期の繊維産業や製鉄業に関する世界遺産と観光資源化などその現代的利用について、詳細については畦地・米田・中垣編著、産業情報研究所叢書 12『地域アイデンティティを鍛える』成文堂（2015 年）に記載してある。そこではドイツ・フェルクリンゲンの鉄鋼業については紙幅の関係で記述できなかったが、製鉄所がそっくりそのまま世界遺産として登録され、保存され、展示され（写真1）、国内外から多くの訪問者がいる。日本でも八幡製鉄所の生産設備一式が解体されずに保存されていたら、きっと娯楽を目的としたテーマパーク以上の社会経済的、文化歴史的価値が今なおそこにあったに違いないと、フェルクリンゲン製鉄所を訪れると、思わずにはいられない。

写真１　フェルクリンゲン製鉄所（ドイツ・ザールラント）筆者撮影

また、私の本来の研究領域はフランスの経済・産業・企業に関する歴史であり、フランスでも遺産と地場産業と観光との連関という視点から各地を視察している。有名な世界遺産でもあるモン・サン・ミッシェルは、大学生の頃の純粋な観光で訪れて以来、何度足を運んだことか。修道院という本来の宗教的目的をはなれて、観光産業に大きな経済波及効果を与えている。奈良、京都、鎌倉、日光などの寺院に多くの（外国人）観光客が訪れるのと似ている。他にも、南フランスの香水産業（写真 2）や、シャンパーニュ地方の葡萄酒製造業（写真 3）など、研究にあたっては書物だけではなく、現地を実際に訪れて肌で体感している。なぜその地でその産業が勃興したのか、現在はどうなっているのかなど、現地を実際に訪れないと分からないことも多い。いわゆる工業都市を訪れたこともあるが、重工業など不況業種の街は、一般的に失業率が高く、殺風景で殺伐としていて、治安の面で身の危険を感じることもないわけではない。

最近は日本の産業遺産と観光に興味を抱いている。富岡製糸場は世界遺産登録前に訪れたのでまだそれほどの賑わいではなかったが、明治日本の産業革命遺産群も訪れたいと思いつつ、話題性が先行しているせいもあり、二の足を踏んでいる。加えて訪れたい場所やしたいことが多々あり、興味が拡散してしまって、なかなか研究が進まないのは怠慢と言われてもしかたない。

写真 2　香水メーカーFRAGONARD 社（南仏・グラース）筆者撮影

写真 3　シャンパン醸造 POMMERY 社（ランス）筆者撮影

2. ゼミ活動

こうした指導教員の専門性から、現 3 年生の専門演習では、通常の演習授業、すなわち経営史関係の基礎的書物の輪読やプレゼンテーションに加えて、地域と観光を考えることも学習のテーマのひとつとして、課外活動を実施している。ゼミ生間の親睦を深めるという狙いもあるのだが、単に飲んだり食べたりではなく、遊びながら、楽しみながら、興味関心を引き出し、学び、考えるというわけである。テーマは産業遺産と観光とまちづくりをあわせた『地域の現状と将来について』の考察である。

昨年の専門演習 I では、名古屋の「トヨタ産業技術記念館」を訪れた。自動織機の発明で有名な豊田佐吉によって設立された豊田自動織機製作所栄生工場の地に、工場建物を保存利用して設立された繊維産業と自動車の博物館である。時期は違ってもイギリスの工業化と日本の近代化を開始した繊維産業の機械の過程と大量生産について主として学んだ。

専門演習 II では「長島リゾート」を訪れた。遊園地で遊んでいると誤解されそうだが、集客できるがどうかは実際にお金を払って遊んでみるとよく分かる。私自身はジェットコースターなどの遊具は苦手なのだが。併設するアウトレット・モールも見学した。学生によって意見が分かれたが、地域と観光を考える機会になった。ところで、名古屋が訪れたい都市として魅力に欠けると言われているようだが、愛知は製造業の比重が高い上にトヨタ自動車を抱える車社会なので、観光資源が広範囲に分散しており、周辺の名勝、旧跡、文化や伝統芸能、文化・観光施設、産業遺産まで含めて、名古屋市内に限定した魅力ではなく、名古屋圏の魅力を考える必要があるのではないか。

さて、今年になって、専門演習Ⅲでは「明治村」を訪れた。紡績機、織機、蒸気機関や蒸気ハンマーなどとともに、富岡製糸場で実際に使用されたブリューナ式蒸気機関が展示保存されている。なぜここに富岡製糸場の蒸気機関が展示されているのか、職員の方にその経緯も伺ったが、移譲当時の機関を巡る認識の相違が影響しているようである。村内にはもちろん明治期の歴史的建築物が多数点在し、博物館としても、テーマパークとしても楽しめる。

専門演習Ⅳでは、課外活動として、2 月末に沖縄合宿を予定している。なぜ沖縄か、というと理由はいろいろあるが、ゼミに沖縄の学生がいること、「建学の精神と社会生活」の授業で沖縄の基地問題を学んだこと、基地が沖縄の経済に与える影響を考えること、経済活動における観光産業の比重が高いこと、純粋に楽しそうであること、などなどである。可能であれば米軍基地を訪れたいと考えている。基地問題についてはいろいろな考え方があるが、学生には座学だけでなく体感してもらいたい。また、私自身も、自分の目で確かめたいという思いがある。その上であらためて議論するならすればいいと思う。他にも、観光資源であるところの水族館や景勝地、第二次世界大戦の記録と記憶、沖縄の歴史と文化を学ぶ施設、世界遺産を訪れる、ビールや特産物の加工工場を訪れるなどを検討しているところである。それらを通して、沖縄という地域の産業や経済、社

会を考える一助とし、あわせて自分たちが暮らす岐阜という地域を比較検討する機会としたい。

来年度の専門演習ⅤあるいはⅥでは、海外視察を実現したいと考えている。しかし、これは、金銭面でも安全面でも難しいだろう。加えて就職活動が順調に進展していなければ、それどころではない。もし条件が整えば、より広い視野で、多面的に、深く物事を思考できる人間に成長するための、ひとつの機会を学生に用意してあげられたらと、大きなお節介ながら考えている。